

# 「自分で考え、学び合い、振り返る」を1コマの基本に。 探究学習でも小単元で個と集団の学びを繰り返す

## 秋田県 だいせん おおまがり 大仙市立大曲小学校

秋田県大仙市立大曲小学校では、秋田県が長年推進してきた探究型授業を基盤として、2018年度から全教科の授業で、「主体的・対話的で深い学び」を実践するための校内研究を行ってきた。授業づくりで重視するポイントは、個別学習と協働学習を行き来して、学びの質を高めることだ。「総合的な学習の時間」でも、そうした個と集団の学びを行き来する活動によって、子どもは自己の変容を自覚し、考えを深めている。



◎校是は、「こころひらいて ゆめをそだてる」。学校教育目標は、「I will, I can. One for All, All for One. ～きっとできる みんなといっしょに」。「総合的な学習の時間」は、『『地域で学び』『地域から学び』『地域に生きる』』子どもの育成」を研究主題として活動を推進している。

開校 1874 (明治7) 年  
校長 高野一志先生  
児童数 693 人  
学級数 29 学級 (うち特別支援学級 4)

### 子どもが見通しを持って学びに 集中できる「教えのきほん」

校内研究重視の学校文化を有する大仙市立大曲小学校は、2018～19年度、国立教育政策研究所の研究推進拠点校として、「主体的・対話的で深い学び」に関する学習・指導方法の研究を行った\*1。指定期間終了後も研究は継続。2021年度は、算数科を中心とした「見方・考え方」を働かせる学び合いと、「人・もの・こと」にかかわって主体的にテーマを追究する「総合的な学習の時間」の活動に重点を置き、研究に取り組んでいる。高野一志校長は次のように語る。

「毎年、前年度までの研究の成果や課題と、子どもの実態に基づいて、研究テーマを設定しています。本校の子どもは、素直に伸び伸びと学ぶよさがある半面、各種調査を見ると、自己有用感や自尊感情がやや低いという結果が出ています。そこで、子どもが自分のよさに気づき、周囲に認められる喜びを感じられるよう、他者とのかかわりを意識した活動を、授業に取り入れています」

授業づくりの土台となるのは、小・中学校の学びに連続性を持たせるため、中学校区全体で作成した授業の手引き「教えのきほん」だ。同市では、中学校区ごとに小・中学校が連携して教育活動を行う「大仙教育メソッド」(P.11教育委員会の施策参照)を推進しており、「教えのきほん」はその1つに位置づけられている。

「教えのきほん」は、以前から実施されてきた秋田県の探究型授業を基盤とし、授業の流れを「めあて」「自力解決」「学び合い」「まとめ」「振り返り」と設定(図1)。すべての授業がこの流れに沿っており、子どもが見通しを持って授業に集中できるようにした。また、板書の仕方やノートへの写し方なども示している。

### 自分の考えを持たせてから 協働的な学びにつなげる

授業の流れでとりわけ重視しているのは、「個」と「集団」の学びをつなぐことだ。5学年担任の畑七彩先生は次のように話す。

『『自力解決』で個人の考えを明確



校長  
高野一志  
たかの・ひとし  
同校に赴任して1年目。



研究主任  
今野靖子  
この・やすこ  
同校に赴任して5年目。



教諭  
畑七彩  
はた・ななせ  
同校に赴任して3年目。  
5学年担任。

に持たせてから、ペアやグループ、全体での『学び合い』を行っています。自分の考えがあるからこそ話し合いの場で発言でき、他者の考えをしっかりと聞いて、理解しようとしています」

「学び合い」では、教員は子どもの考えを広げる発問をし、子どもの発言をつなげることに努めている。「教えのきほん」には、「何のために何を話せばよいのかを理解している」「話をつなぐことを意識している」など、

\*1 研究テーマは、「教科等の本質的な学びを踏まえた主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)の視点からの学習・指導方法の改善の推進」。

図1 「教えのきほん」で示されている1時間の授業の流れ(全教科共通)

めあて	学習のねらい・学習課題(めあて)・学習活動・評価の整合性を図る
自力解決	児童一人ひとりが自分の考えを持って話し合いに参加できるようにする
学び合い	確かな発問が学び合いの質を高める⇒発問の精選
まとめ	「まとめ」は「学習課題(めあて)」と整合させる
ふり返し	自己の変容を自覚できるように振り返りの視点を示す

※大曲小学校の提供資料を基に編集部で作成。

図2 高学年の「ふり返りの5つの視点」

- 5年生 ふり返し
- 1 わかったこと
  - 2 自分や友だちの考えのよかったところ
  - 3 自分の考えが  
変わったり深まったりしたこと
  - 4 もっと学習したいこと
  - 5 生活や学習で役立てたいこと

※大曲小学校の提供資料を基に編集部で作成。

5つの「話し合いの約束」があり、それを子どもにも示していると、研究主任の今野靖子先生は説明する。

「授業づくりの際には、場面ごとに話し合う必要性を教員が十分に検討しており、子どもに話し合いのねらいを説明します。ねらいを意識することで、子どももなんとなく話し合うのではなく、明確な目的に向けて意見を出し合うようになり、協働学習が充実していきます」

協働学習で得た学びを次の学習につなげられるよう、授業の終わりには必ず振り返りを行う。「教えのきほん」には、低・中・高学年ごとに「ふり返りの5つの視点」(図2)があり、各教室に掲示し、教員は学習内容に合わせて、「今日は3番の視点で振り返ろう」などと活用している。

「自分の考えが、協働学習によってどう変容したかを振り返ることで、次の学びの見通しや学習意欲につながり、自分自身を客観的に捉えるメタ認知能力も磨かれます。自らの変容や成長を自覚できれば、自己有用感も向上するでしょう。そのように、集団の学びと個の学びを繰り返すことを大切にしています」(高野校長)

### 探究学習の各プロセスで 個と集団の学びを行き来する

2021年度の研究テーマの1つである「総合的な学習の時間」でも、個

図3 「総合的な学習の時間」探究プロセスの繰り返し(個別学習と協働学習の往還)例

#### 5年生 「大曲の食を守り隊！ 発見・発信！ ふるさとの食の魅力」(全35時間)

**単元目標** 地域の食の魅力や問題について興味を持ち、自分の課題を設定し、調べる活動や体験活動を通して、学んだ地域の食について発信する。それらの活動を通して、食に携わる人々の願いや工夫に気づくとともに、地域の食を未来につなげるために自分たちにできることを考え行動できるようにする。



( )内の数字は授業時数。※大曲小学校の提供資料を基に編集部で作成。

と集団のつながりを重視している。

畑先生が担任を務める5年生では、地域の食の魅力や課題に気づき、自分たちにできることを考えて発信する活動に取り組んだ。全35時間の中に「発見編」「実態調査編」「発信編」の3つの小単元を設け、各小単元で「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」等を行い、課題解決能力の育成を図った(図3)。

「小単元ごとに必要なプロセスを重ねて、個別学習とグループや全体による協働学習を行き来し、子どもが考えを深められるような授業を展開しました」(畑先生)

各活動で活用したのは、思考ツール(巻末のキーワード解説参照)だ。発見編では、「イメージマップ」でアイデアを広げたり、「リーダーチャート」で多様な視点の重要度を整理したりして、食の魅力や課題を探った。発信編では、グループで計画的に活動を進められるよう、「ステップチャート」でやることを整理した。

「自分の考えを整理したり、他者の意見を比較して分類したりと、思考ツールが考えを深める手助けとなりました。今後は、教科の授業でも、子どもが思考を整理する際には活用したいと考えています」(畑先生)

## 自身の変容や成長を自覚し、次の見通しや意欲につなげる

単元の最後の35時間目は、すべての活動を振り返り、自分たちの問題意識が高まり、自ら進んで地域とかかわってきたことに気づけるような活動を行った(授業レポート1~6参照)。

本時のねらいを確認した後(1)、地域の食について発信したいと最も強く感じた場面を振り返り、それに関する自身の掲示物をタブレット端末で撮影した(2)。そして、その写真をグループ内で見せ合いながら、どの学習や活動で、どのような気づきや変化があったのかを伝え合った(3)。

子どもたちは、「全校にアンケートを取ったら、地域の食について知っている人が少なく、みんなに伝えたいと強く思った」「地域の食に詳しいゲストティーチャーから『何事も楽しんでやろう』と言われたことがきっかけになった」などと、それぞれが変化したきっかけを語った。

次に、グループで話し合った内容をクラス全体で共有する場面では、畑先生の自作による身長計を使った「レベルアップメーター」で、高まった思いを示しながら、数人が振り返りを発表した(4)。

さらに、教科の学習内容が、探究学習にも役立つと気づくことをねらいとしたグループワークも行った(5)。タブレット端末の共同編集ソフトを活用し、「話を聞いてメモを取る(国語科)」「図や表を使って分かりやすくまとめる(国語科)」「グラフを読み取る(算数科)」「農業の実態(社会科)」など、教科での既習内容を記したカードを、畑先生が用意。子どもは、それらを探究活動のどの場面で活用したかを考えて、あてはまる場面にカードを配置し、グループ内でそれを共有しながら話し合った。

「タブレット端末上なら間違えてもすぐに修正できるため、子どもは『とにかく書いてみよう』などと積極的にになれるようです。また、共同編集機

能を使えば、入力した内容を全員がリアルタイムで共有できるため、協働学習が促進されるよさがあります」(畑先生)

本時の振り返りでは、本時の「目指す児童の姿」に対応して、「学習の中でがんばったこと、またはできるようになったこと」「『大曲の食』について、知ったことや考えたこと、感じたこと」「地域とかかわることができたか」という3つの振り返りの視点を示した。子どもたちは、「友だちと協力して、見てくれる人に『これを食べてみたい』と思ってもらえるものを作れるようにがんばりました」「自分1人ががんばるのではなく、他の人と支え合って学習を大成功させられたと思います」「大曲には有名な食べ物は少ないと思っていたけれど、意外にたくさんあると分かりました」など、自己の変化を記述した(6)。

「本時の振り返りは、協働学習による自身の変化を捉える機会にしたいと考えました。子ども自身が学校で

### 授業レポート 探究学習

#### 5年生「総合的な学習の時間」(全35時間中の35時間目)

学習課題「守り隊レベル」\*2がアップしたのはいつか？なぜか？「大曲の食を守り隊！」の活動を振り返ろう。

#### 1 本時のねらいを説明 8分間



畑先生が「クラスのアンケート結果では、大曲の食の魅力や課題への認知度が、全員、学習前より高まっていた」と伝えて、これまでの活動を振り返った後、「『守り隊レベル』がアップしたのはいつか？なぜか？」という本時の課題を提示した。

#### 2 個人で活動全体を振り返る 5分間



初めに、「守り隊レベル」がアップした時が「大曲の食について発信したい思いが高まった時」であるとクラス全体で共有。これまでの活動の中でそうした思いが最も高まった場面を、各自が振り返り、それに関連する自身の掲示物をタブレット端末で撮影した。

#### 3 振り返りをグループで発表 9分間



自分が撮影した写真を見せながら、その活動を通して考えたことや感じたことを、グループのメンバー同士で伝え合った。畑先生が用意した、考えの視点や話型、「レベルアップメーター」を示した資料を基に、自身の気づきをしっかり伝えていた。

\*2 大曲の食を大事にしたいという気持ちの強さ。



教育委員会の施策

中学校区ごとの方向性を定め、教育活動を行う「大仙教育メソッド」を推進

2016年に策定した大仙市教育大綱では、教育目標に、「生きる力を育み、社会を支える創造力あふれる人づくり」を掲げています。この「生きる力」となる資質・能力を「基礎となる力」「学ぶ力」「活かす力」とし、それらの育成を図るため、中学校区ごとに明確な方向性を定めて、教育活動を行う「大仙教育メソッド」を推進しています。各中学校区が、小・中学校校長の経営感覚と各学校の強みを生かして活動しています。教育活動に統一性が出て、小・中の接続が滑らかになる利点もあります。

授業づくりでは、市を挙げて「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す中で、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実を図っています。本市では元々、秋田県が推進してきた探究型授業を実践

する中で、個と集団をつなぐ学びを重視してきました。「個別最適な学び」では、少人数授業やチーム・ティーチングといった指導形態の工夫、児童生徒主体の探究型授業などを行っています。「協働的な学び」では、協働の際に必要な言語活用能力の育成に力を入れています。また、中学校区ごとに地域住民等が支える「地域学校協働活動本部」を設置し、地域の教育力を生かした体験活動などの充実を図っています。今後はICTも積極的に活用して、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一層一体化させていく考えです。



大仙市教育委員会  
教育指導課次長  
兼教育研究所長  
**山信田 浩**  
やまだ・ひろし

●自治体概要  
人口 約7万8,000人  
面積 866.8km<sup>2</sup>  
市立学校数 小学校20校、  
中学校10校  
児童生徒数 4,945人

学ぶことの意味を改めて考え、日々の授業でも自分の成長に気づけるようになってほしいと思います」(畑先生)

子どもの心を動かす  
地域との協働学習を充実

探究学習において子どもが大きく成長する場面の1つは、地域との協

働だ。振り返りでも、「お菓子屋さん(地域の老舗店舗)を通して地域の食の魅力を知った」など、地域とかかわる活動の中で気づきが得られたといった記述が多く見られた。同校では、地域連携は協働学習を促進する重要な要素だと捉えている。

「何かを調べて分かったり、疑問を持ったり、課題意識が生まれたりし

た時に、そこで終わるのではなく、地域の課題や人々の思いと結びつけることで、『自分にもできることがありそう』などと、子どもの心が動いて成長していく姿が見られました。そうした地域との協働学習を柱の1つに据えて、『主体的・対話的で深い学び』の充実を図っていきたいと考えています」(高野校長)

4 全体で振り返りを共有 8分間

8分間



協働

これまでの活動を示す黒板の図の中で「守り隊レベル」が高まったものに自分のネームプレートを貼り、クラス全体の状況を確認。数人が、地域とのかかわりが高まった度合いを、身長計で作った「レベルアップメーター」で示しながら、自分の変化を発表した。

5 教科学習とのつながりを考える 7分間

7分間



協働

タブレット端末に用意されたカードに書かれた他教科の既習内容が、3つの小単元のどの活動で役立ったのかを考えた。共同編集ソフトを活用し、グループのメンバーがどの活動にどの教科のカードを配置したかをリアルタイムで共有しながら話し合った。

個別：個別学習

協働：協働学習

6 本時の振り返り 8分間

8分間



個別

本授業に参加した、活動の協力者である地域の老舗菓子店の店主から講評を聞いた後、本時の振り返りをワークシートに記入。数人が発表して全体で共有した。畑先生は、培った課題解決力を今後の授業でも生かしている。いろいろな問題解決に取り組んでいこうと伝えた。